生を支える意志について －フェレンツィとドルトを参照して－

<table>
<thead>
<tr>
<th>著者</th>
<th>森 茂起</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>雑誌名</td>
<td>心の危機と臨床の知</td>
</tr>
<tr>
<td>巻</td>
<td>なし</td>
</tr>
<tr>
<td>ページ</td>
<td>なし</td>
</tr>
<tr>
<td>発行年</td>
<td>2019年3月20日</td>
</tr>
<tr>
<td>URL</td>
<td><a href="http://doi.org/10.14990/00003318">http://doi.org/10.14990/00003318</a></td>
</tr>
</tbody>
</table>
生を支える意志について

フェレンツィとドルトを参照して（）

森 茂起

1 問題設定

キーワード：死の欲動、生への意志、エディプス

本論の主題は、筆者が児童福祉領域における心理療法や養護実践に関わってきた経験に由来する。それらに関する二つの精神分析家、フェレンツィとプランツー・ドルトとの関連については、ずいぶん長い経験を積んでじっとして思い至った。ここに挙げるのは、特に、出生をめぐる事情の人生史への位置付けという課題である。それは社会的養護実践において日々出逢う課題であり、特に、「私は望まれて生まれたのか」という問いについて、またその問いへの接近法について考えておくこと

この問いは、記憶の残る幼児期以降の体験からの疑念、つまり親の言動や親との関係に由来する何らかの不快感発する疑念にしまり、多々の場合、そうした疑念を抱かせる親の言動や親との関係の起源を探る行為に向かうであろう。親との対話を要する課題である。

この問いは、記憶の残る幼児期以降の体験からの疑念、つまり親の言動や親との関係に由来する何らかの不快感発する疑念にしまり、多々の場合、そうした疑念を抱かせる親の言動や親との関係の起源を探る行為に向かうであろう。親との対話を要する課題である。

もし、それが実在するものであると考えなければならないならば、あるいはそれはどのような対話を成立しないか、古くからの方法で探ることにはならない。親族に問いかける、古い写真から読み取ろうとする。出

生をめぐる事情を残す資料を探すことになる。
フェレンツィにおける「望まれない子ども」

2

「死の欲求」についてフェレンツィは、幼児期外傷が後年の風俗傾向に影響するというジョーンズの論文に触れて、その理論の射程をさらに遠くまで伸ばそうとする。彼は、二人の患者について、声帯で二つの幼児期の身体症状を自殺傾向の象徴と捉えたのち、「患者は、二人とも、いわゆる家族の望まれない客としてこの世に生まれた」（p. 22）と言う。一人は、明らかに負担過剰な思考を、実際間でも無くなかった父親の子どもであった。フェレンツィは、この子ども達が明らかに「母親の反感ある」と考えたが、

先駆にて当たる議論を積み重ねた。特に、幼児期の虐待的な関わりが子どもの成長に与える影響に注目して行った。"神経症の病因における外傷要因"（Ferenczi, 1923-1925: pp. 156）日本語訳

で父親と母親が相異なる

で、父親と母親は同じだと考え

で活躍した精神分析家であり、フェレンツィは、一九二〇年代前半から同時代の精神分析の

ベース概念を提出するなど、二〇世紀の一〇年代から三〇年代の

初頭までの精神分析に多大な貢献を果たした（森、一〇八）。

フェレンツィは、一九二〇年代前半から同時代の精神分析の

潮流と袂を分かち、今日「関係論」という名で括られる理解の
投稿論文

「生への意志をくすられた（3）」と観察する。つまり、生後まもない時期に存在した、自らの生を歓迎していない環境が、子どもを死に傾かせたと理解する。ま、彼がその概念を提出する以前の論考だが、言葉を広く取れば「攻撃者との同一化」の一例とも言える。

次に彼は、「子ども時代から生の嫌悪が消えたことのない並で、子どもが母親に目を向けた」という結論を導く。「子どもを暖かく迎える気があるなら、一体なぜ彼女を生んだのかという答えられないままの問いの延長に他ならない」と書く。

ここでは「父児の反応」など、生後一期間の経験の影響だけではなく、出生前の親の観の影響を考慮に入れることになる。

これの観察に従ってフェレンツィは、生の欲動が人生の始まりに最も強さと考える用具が見方を変える。確かに、心の成長後の発達には目覚ましいものがあるが、それは「胎児と新生活が保護される時に、生の欲動が心の成長のきっかけとなる」という考え方を示している。
生プロセスを別の観点、つまり幼児期の養育者との関係性から考える機会を提供し、晩年の関係論的視点を促進した。その一つの結果が、先に述べた「外傷要因」の重視だった。

攻撃者との同一化の概念を提示した論文の発表は、ロイドから否定されたが、実は、性的発見を関係論的に理解すること、つまり親との関わりに依存するものとして理解する視点がない通常の単調的な見解を踏まえて、幼児期、特に緊張性を伴う外傷的体験を外傷的発見として捉えることができる。

エレンツィはさらに、出生以前にまで視野を拡張したのである。ただし、この論点は、ロイドとランクの理論に刺激されながら、ランキングの枠組みの外に、出生以前の生を含める構想である。

ロイドは、同時期に、すると、ランキングとの「恋愛発見」は不十分であった。

このようなネットワークと解釈の必要性を示唆する点が異なっている（フェレンツィ, 1924, 1927）。しかし、ロイドは、フロイトとは、普通の「外傷的」とはみなされない形式の発見に対象を、出生という生存の重要な一環として捉えられる。

この文脈を踏まえて、望まれない子どもと死の欲求という論文をあらためて見ると、それはフェレンツィ晩年の関係論的外傷論の開発と連動して、死の慾求をも関係論的に捉える視点を提供していることがわかる。

非存在から存在への移行を、生物的主体としての個人の発生から理解しようとしたラッサーサと異なり、養育者との関係によって決定されるものとそれらを理解する。言い換えれば、深い退行のなかで患者たちが表現した、望まれなかった、歓迎されたかったという願望から出発した。
幼児期体験と事後性

3

ここまでフェレンツィの議論を整理した上で、「望まれて生まれたのか」という問題に関連する臨床的課題を考える。二つの領域があると思われる。

第一は、出生に至るまでの親の状況が、子どもの成長に与える影響である。先に見たように、外的現実としての出来事や事情と親の内面の現実としての親の心の両者がここに関連する。出生以前の子どもへの内面の現実をどこまで考えられるかは議論の仕方によるだろう。

この領域は、子どもの養育の問題としてすでに幅広く認識されている。虐待リスクの一につく「望まぬ妊娠」が挙げられている。「望まなかった子ども」の養育には問題が起こることができる。あからさまな拒否など、ネグレクトという言葉でまとめられる状況が発生しつつある。あるいは、望まないのに生まれた世話要求する子どもへの攻撃という虐待にもつながる。養育や出産等のそれ自体が外傷的な作用を及ぼす。多くの場合、知らなかった事実が意表を突く。事実を後知後覺で理解することは、幼少期からの謎を解消する働きとともに、それ自体が外傷的な作用を及ぼす。世話を要求する子どもへの攻撃という虐待にもつながる。養育や出産等のそれ自体が外傷的な作用を及ぼす。多くの場合、知らなかった事実が意表を突く。事実を後知後覺で理解することは、幼少期からの謎を解消する働きとともに、それ自体が外傷的な作用を及ぼす。世話を要求する子どもへの攻撃という虐待にもつながる。養育や出産等のそれ自体が外傷的な作用を及ぼす。多くの場合、知らなかった事実が意表を突く。事実を後知後覺で理解することは、幼少期からの謎を解消する働きとともに、それ自体が外傷的な作用を及ぼす。世話

この二つの領域の存在を考えると、「非存在から存在への移行」とフェレンツィの言うような「愛」、優しさ、世話の膨大な投入は前者の領域の課題である。後者の領域は、「彼女を暖かく迎える気のない体なら彼女を生んだのか」という問いの背景をなしている。この問いは「暖かく迎えた」結果として、の「愛」や「世話」に対してだけでなく、そもそも彼女はその問いに押されて、家族の背景や、親が自らを産んだ事実などを可能な限り調えたであろう。そして、長してはじめて知った事
実があるだろう。フェレンツィは、出生後の温かい世話の必要性に言及するのみで、出生前に立ったあるいは受胎前に先立たされる彼女の問いは、「生きるに値する」という感覚にそ
れが関わっていることを表現。フェレンツィが関心を注ぐ、「望
まれない子ども死の欲動」の問題の重要な要素と考えられる
筆者は、出生前に立つ親の思いを、出生後に子どもと親との
間で発達する愛着関係や感情関係から区別する必要があると考
えていている。前者は、むしろ子ども持つことを望む「意志」であっ
て、それは子どもを存在へもたらす働きをしたもののである。
自身の出生や受胎の時期に先立つ親の意志についての子ども
の問いは、過酷な家族背景を持つ子どもが発する本質的問いである。
子どもは、なぜ世話をしてくれなかったのか、酷い扱いをし
たのか、という問いとは別に、なぜ自分を産んだのかという問
いをもっている。ただし、「望まれて生まれた」という感覚が
一定程度ある場合には、特段意識して問うことのない問いであ
る。それはこの問いへの肯定的な答えが暗黙のうちに得られ
ているからである。

親側から見ても、子どもを欲しいという意志と、子どもへの
愛情はある程度独立して存在する。子どもを持つ意志は、愛
お仕事、兄弟、祖父母、病、経済状況など、性や愛を巡るあら
わ

4 エディプスと出生の秘密
程で、議論の焦点は外的暴力から内的葛藤へ、外傷からリビドー発達と移った。父によって象徴される第三者によるリビドー発達と移った。父によって象徴される第三者によるリビドー発達と移った。父によって象徴される第三者によるリビドー発達と移った。父によって象徴される第三者によるリビドー発達と移った。父によって象徴される第三者によるリビドー発達と移った。父によって象徴される第三者によるリビドー発達と移った。父によって象徴される第三者によるリビドー発達と移った。父によって象徴される第三者によるリビドー発達と移った。父によって象徴される第三者によるリビドー発達と移った。父によって象徴される第三者によるリビドー発達と移った。父によって象徴される第三者によるリビドー発達と移った。父によって象徴される第三者によるリビドー発達と移った。父によって象徴される第三者によるリビドー発達と移った。父によって象徴される第三者によるリビドー発達と移った。父によって象徴される第三者によるリビドー発達と移った。父によって象徴される第三者によるリビドー発達と移った。父によって象徴される第三者によるリビドー発達と移った。父によって象徴される第三者によるリビドー発達と移った。父によって象徴される第三者によるリビドー発達と移った。父によって象徴される第三者によるリビドー発達と移った。父によって象徴される第三者によるリビドー発達と移った。父によって象徴される第三者によるリビドー発達と移った。父によって象徴される第三者によるリビドー発達と移った。父によって象徴される第三者によるリビドー発達と移った。父によって象徴される第三者によるリビドー発達と移った。父によって象徴される第三者によるリビドー発達と移った。父によって象徴される第三者によるリビドー発達と移った。父によって象徴される第三者によるリビドー発達と移った。父によって象徴される第三者によるリビドー発達と移った。父によって象徴される第三者によるリビドー発達と移った。父によって象徴される第三者によるリビドー発達と移った。父によって象徴される第三者によるリビドー発達と移った。父によって象徴される第三者によるリビドー発達と移った。父によって象徴される第三者によるリビドー発達と移った。父によって象徴される第三者によるリビドー発達と移った。父によって象徴される第三者によるリビドー発達と移った。父によって象徴される第三者によるリビドー発達と移った。父によって象徴される第三者によるリビドー発達と移った。父によって象徴される第三者によるリビドー発達と移った。父によって象徴される第三者によるリビドー発達と移った。父によって象徴される第三者によるリビドー発達と移った。父によって象徴される第三者によるリビドー発達と移った。父によって象徴される第三者によるリビドー発達と移った。父によって象徴される第三者によるリビドー発達と移った。父によって象徴される第三者によるリビドー発達と移った。父によって象徴される第三者によるリビドー発達と移った。父によって象徴される第三者によるリビドー発達と移った。父によって象徴される第三者によるリビドー発達と移った。父によって象徴される第三者によるリビドー発達と移った。父によって象徴される第三者によるリビドー発達と移った。父によって象徴される第三者によるリビドー発達と移った。父によって象徴される第三者によるリビドー発達と移った。父によって象徴される第三者によるリビドー発達と移った。父によって象徴される第三者によるリビドー発達と移った。父によって象徴される第三者によるリビドー発達と移った。父によって象徴される第三者によるリビドー発達と移った。父によって象徴される第三者によるリビドー発達と移った。父によって象徴される第三者によるリビドー発達と移った。父によって象徴される第三者によるリビドー発達と移った。父によって象徴される第三者によるリビドー発達と移った。父によって象徴される第三者によるリビドー発達と移った。父によって象徴される第三者によるリビドー発達と移った。父によって象徴される第三者によるリビドー発達と移った。父によって象徴される第三者によるリビドー発達と移った。父によって象徴される第三者によるリビドー発達と移った。父によって象徴される第三者によるリビドー発達と移った。父によって象徴される第三者によるリビドー発達と移った。父によって象徴される第三者によるリビドー発達と移った。父によって象徴される第三者によるリビドー発達と移った。父によって象徴される第三者によるリビドー発達と移った。父によって象徴される第三者によるリビドー発達と移った。父によって象徴される第三者によるリビドー発達と移った。父によって象徴される第三者によるリビドー発達と移った。父によって象徴される第三者によるリビドー発達と移った。父によって象徴される第三者によるリビドー発達と移った。父によって象徴される第三者によるリビドー発達と移った。父によって象徴される第三者によるリビドー発達と移った。父によって象徴される第三者によるリビドー発達と移った。父によって象徴される第三者によるリビドー発達と移った。父によって象徴される第三者によるリビドー発達と移った。父によって象徴される第三者によるリビドー発達と移った。父によって象徴される第三者によるリビドー発達と移った。父によって象徴される第三者によるリビドー発達と移った。父によって象徴される第三者によるリビドー発達と移った。父によって象徴される第三者によるリビドー発達と移った。父によって象徴される第三者によるリビドー発達と移った。父によって象徴される第三者によるリビドー発達と移った。父によって象徴される第三者によるリビドー発達と移った。父によって象徴される第三者によるリビドー発達と移った。父によって象徴される第三者によるリビドー発達と移った。父によって象徴される第三者によるリビドー発達と移った。父によって象徴される第三者によるリビドー発達と移った。父によって象徴される第三者によるリビドー発達と移った。父によって象徴される第三者によるリビドー発達と移った。父によって象徴される第三者によるリビドー発達と移った。父によって象徴される第三者によるリビドー発達と移った。父によって象徴される第三者によるリビドー発達と移った。父によって象徴される第三者によるリビドー発達と移った。父によって象徴される第三者によるリビドー発達と移った。父によって象徴される第三者によるリビドー発達と移った。父によって象徴される第三者によるリビドー発達と移った。父によって象徴される第三者によるリビドー発達と移った。父によって象徴される第三者によるリビドー発達と移った。父によって象徴される第三者によるリビドー発達と移った。父によって象徴される第三者によるリビドー発達と移った。父によって象徴される第三者によるリビドー発達と移った。父によって象徴される第三者によるリビドー発達と移った。父によって象徴される第三者によるリビドー発達と移った。父によって象徴される第三者によるリビドー発達と移った。父によって象徴される第三者によるリビドー発達と移った。
的父の攻撃性を「ライウスコンプレックス」と呼んだ
的な父の攻撃性を「ライウスコンプレックス」と呼んだ
の主体ではなく、犠牲者の立場に置くことを指摘しつつ、患者を
の主体ではなく、犠牲者の立場に置くことを指摘しつつ、患者を

1982、1983：小林、2002、Bergmann、1993、Ley、2011）。

虐待的な親の心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理的理解をライウスの心理理解をライウスコンプレックスの視点から、子どもを殺した

の観点から提示している一つの問題を取り上げておたい。パーゴ

これに関し、バーガン（Bergmann、1993；p.312）が治療

的観点から提示している一つの問題を取り上げておたい。パーゴ

の観点から提示している一つの問題を取り上げておたい。パーゴ

の観点から提示している一つの問題を取り上げておたい。パーゴ
5 考える働きの発達

親の子どもへの想い、そしてその想いに対する子どもの思い、という問題には、すでに述べたように、幼児期体験の作用と、「事後的」に関することに本質的な作用を及ぼす。しかし、構造としての層構造を踏まえておく価値があるものの、私たちが実際に出会う臨床的課題には、二つの層が混合し転換していると考えられる。

その点を、ビオンに始まる「考える働き」に関しての議論は参考をもって少し考えてみたい。ビオンは、エディプス神話を考える装置の発達と対応していることに気づき、考える働きの支配となる母体としてのエディプス神話をフィクスを読み直した（Bion, 1962; Searleman & Searleman, 1969）。

すなわち、この考え方に基づくと、「望まれて生まれたのか」についての考えも、あるいはそれを考えための「心の空間」の生成も、出産後も生じる時期の両親と子どもの関係、つまり幼児期エディプス構造に発していることになる。そして、考える空間の発達の結果、一定の年齢に達した時、この問いについて考えるこ

4 器器論的問題からみた童話 manic depressive 般に拡張しなければならない。実親以外の養育者が中心となる
場合、実親との関係という観点の中で展開するエディプス構造
と、日々の生活の中で体験する複数の養育者との関係・ここに
ももちろん想定が関わる・で展開するエディプス構造が重なり
合ったため、その重なりが子どもがどう経験し、どうそれに
いて考えるかが重大な問題である。エディプス構造は、考える
働きの基盤であると同時に、考える対象でもある。
こうした場合も含め、複数の養育者との関わりが子どもを
える空間の発達を促し、のちに望まれて生まれたのか、の間
いに直面することを可能にするだろう。ブリトーンの論を援用
すれば、養育者間に葛藤も含む交流があることがまた重要であ
る。複数の養育者が、自分の世話のために脳をかい、ときには
衝突しながら協力していることの経験が子どもにとって重要で
ある。
考える働きの成長によって、理解できていなかった現実への
直面が可能になるときがある。親との関係が欠けていた子ども
がふと「僕のお母（父）さんどこにいるのか」と疑問を抱
くときがあるだろう。ある子どもは、両親との関わりが全くな
いことから、「僕はおっから生まれた」と言い続けていた。おそらく
は子どもには親があるという意味で、これまでに見た現実に対して
「見て見ぬ振り」をするために生まれた考えであろう。しかし
考えるとの成長により、あるとき「なぜ僕にはお母（父）さ

6 出生に先立つ三つの意志

フェレンツィの論文を基礎に、エディプスの理論に基づく議論によって、望む「意志」が形成される。その際、以下のような三つの要素が重要である。

1) 運命の捉え方：フェレンツィの理論は、運命が決定的な要素であると捉えている。運命論を理解するためには、運命に対する理解が必要である。
2) 価値の判断：価値は、運命に対する理解に基づいて判断される。価値を理解するためには、運命に対する理解が必要である。
3) 自己の意志：自己の意志は、運命に対する理解と価値の判断の結果として形成される。自己の意志を理解するためには、運命に対する理解と価値の判断が必要である。

これら三つの要素が、運命に対する理解と価値の判断に基づいて、自己の意志を形成する。自己の意志が形成されたとしても、運命に対する理解と価値の判断が変わらない限り、自己の意志は変化しない。

参考文献：
フェレンツィ (1957) "精神臨床学概論" において、運命の捉え方について詳しく説明している。
「生まれ出る子どもの意志」にも「事後性」の観点を加えつつ、「生まれ出る子どもの意志」にも「事後性」の観点を加えつつ、

「生まれ出る子どもの意志」にも「事後性」の観点を加えつつ、

「生まれ出る子どもの意志」にも「事後性」の観点を加えつつ、


